

新・平家物語 (一)



吉川英治全集

第33卷

川口松太郎

川端 康成

小泉 信三

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

講談社版

吉川英治全集・33

新・平家物語(一)

著者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所

株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二番二
電話東京九四二局二二二二(大代表)
振替東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株式会社
本文用紙 日本バルブ工業株式会社特漉

第一刷発行 昭和四十二年八月二十日

定価 六百八十円

© 一九六七年 吉川英治

目次

“はしがき”に代えて	
ちげぐさの巻	三
九重の巻	一〇七
ほげんの巻	二二
六波羅行幸の巻	三五
常磐木の巻	四七
系譜・系図	四八五

新・平家物語
(一)

ち
げ
ぐ
さ
の
巻

貧 乏 草

『平太よ。また塩小路などを、うろろると、道草くうて、帰るではないぞ』

使の出がけに、清盛は、父忠盛から背へ喚かれた。——その声に、たえず背を追われているようなかれの足つきだった。何といつても、父は、こわい。おとし、保延元年である。

その父親について、かれは初めて、四国、九州へまで渡った。在京の兵をひきい、内海の賊徒を平定に征ったのだ。春四月から八月までかかって、海賊の頭目以下三十余人を数珠つなぎにし、意気揚々と、都へ、凱旋したときの晴れがましきは、忘れ得ない。

(おやじは、えらいのだ。……やはり、本当は、偉かったのだ) 清盛は、それ以来、父への認識をあらためた。こわさが、違ってきたのである。

少年時から、家庭を通じて、かれの心に、映されてきた父なる者は、およそ、社交ぎらいの物ぐさで、出世欲もなければ、経済的なあたたまもなく、ただ貧乏性を頑固に守ることだけが強

い一武人としか見えなかった。

が、決して、それは、童心の描きあげた父親像ではなく、多分に、母から日ごろに吹っこまれる愚痴や環境にも依るものだった。もの心ついて以来のかれの記憶によれば、都も場末の今出川の荒れやしきに、十年の余も、雨もりのつくろい一つせず、庭草も刈らず、住み古して、家の中では、父と母とが、のべつ夫婦喧嘩ばかりやっていた。そのくせ、平太清盛をかしらにして、次男の経盛だの、三男坊だの、四男坊だの、子どもばかりは、次つぎに、産まれていた。

その父は、しかも、とかく官途をきらって、鳥羽の院へも、御所の衛府へも、特に、召されでもない限りは、出仕した例がない。家計は、伊勢の禄地から上がる稲が唯一の収入で、おりおりの賜わり物だの、役得のみいりなどは、一切、なかった。清盛にも、このごろやっと分かってきた。両親のいがみあいも、原因はいつもそこらにあるらしい。母は、口達者で、良人の忠盛からいわせると——油紙に火がついたようによく喋べる女——なのである。

かの女が、忠盛へ、まくしたてるきまり文句は、いつも、こうだった。

『ふたことめには、良人に向かつてと、すぐこわい顔をなさいますが、わが家に、そんな立派な良人顔があるとは、思いもやりませんでしたよ。あなたは、もともと、伊勢平氏のいなか育ちで、汚い貧乏も、性に合っているかもしれないが、わたくしは、都そだちです。親類縁者として、みな藤原一門の公卿堂上ばかりですからね。こんな雨もりだらけな屋根の下で、年じゅう、芋粥や稗飯ばかりをかみつふし、秋といつても、月見の御宴に伺えるではなし、春が来ても、豊樂殿のお花見などは、他人のこと。人間ともむじなとも分からねぬ日を、毎日こうして、

くり返してゆく生活なんて——わたくしは、自分の未来に、夢にも思っていないでした。……ああ、わたくしは何という、不しあわせな女なのである。……子どもさえいなかったら、こんな女の一生を送ってはいなかったのに」

この程度は、序曲である。忠盛さえ、黙っていれば、めんめんなる愚痴と悲嘆は、終わることを知らないのが常であった。

いったいあの女は、どんな点を、最もいいいたのか。天に哭し、地に訴えたいのか。子の清盛も、聞き飽いているが、要約すれば、およそ次のようなことらしい。

まず第一は、良人なる忠盛が、懶惰で、生計をかえりみない。幾年でも家にこもって坐食しているほか、何の能もない。第二の不平は。——自然、親類の藤原一門とも、往き来がたえ、宮中の五節会やら、おりおりのお催しなどにも、気恥かしく出て出られない。あたら、栄花のできる身に生まれながら、つい女の一生を、めちやくちやにしてしまった。……という痛恨。以上のほか、ややもすると。「子どもさえなければ——」という喧嘩の口走りが出てくる。

母の、その最後の極まり文句は、未熟な清盛の心をぐざと刺した。かれは、わけもなく、つらい、悲しい、鳴咽にせかれた。そしてもう十六、七ともなったころには、自然、年に似合わぬませた眼で、母の胸を臆測した。

(もし、子どもさえいなかったら？……母は、どうするつもりだろう)と。

母は、父に嫁いだのを、後悔している。ままになるなら、今でも別れたいのだろう。そして、離別して、おそまきにでも、栄花のできる世界へ帰り、よく口ぐせにいう親類の公卿仲間の

女たちのように、月を簪し、花を着て、牛車に乗りあるき、あの少将、この朝臣と、浮かれ男相手に恋歌などを取り交わして、源氏物語の中の女性みたいな生活を、一ぺんでもしてみたい。そうでもなければ、死にきれない。女と生まれたかきもない。——と、あんなふうに、おりおり、油紙に火がつくものにちがいない。

無条件に母を母と信じきれないで、母を観察する眼ばかり日日養われている子の不幸は、いうまでもなかった。

(……ふん。おれたちが、そんなに邪魔か、ならば、出て行けばよいだろうに。いや、父上も父上だ。なんで、こらえてばかりいるのか。焦れつたいなあ……。くそつたれめ。藤原がなんだ。藤家の一族に親類があるからとて、あんなにまで、威張りちらされている父上のお氣が知れぬわ……。父上の意氣地なしよ。——眇目の伊勢どのは、美人を妻にもつたため、女房負けてござるぞと、世間ではいっているわ)

清盛とて、二十歳近くにもなれば、これくらいな義憤はもつた。世間の例では、子どもは、母親びいきときまつているが、かれの家庭では、あべこべだった。父に加担しないのは、まだ母の乳がさにいる末子と、わけの分らない三男、四男だけで、次男の経盛なども、冷静な性だけに、もの狂いするときの母の唇を、ときには、憎そうにまで、冷やかな眼で見ていることがある。

そんなおり、この兄弟にとつて、世にも情ない氣がするのには、父その人の姿だった。まるで、妻にこき下ろされるために生きている男のように、黙って、やりこめられているではないか。世間のあだ名にされている臉の皮のヒツつた眇目をふせ

て、じつと、自分のひぎの筆を見ていた父……。

顔に、あばたはあるし、あだ名の通りなスガ目だし、四十幾つの男ざかりだが、父はたしかに醜男ではある。正直、子の清盛でも、そう思う。

それにひきかえ、母は美しい。まだ二十代とも見えるほどだ。あれで五人の子の母かと、世間のあやしむのも道理である。そのかわり、いくら貧乏が迫ろうと、身の粧いは崩さなかった。見るに見かねて、召使たちが、食糧の工面もする。そして、垣の古竹やら床板をはいで炊ぎの焚き物にしたり、幼い子らが、垢じみた身なりでビイビイ泣きながら、尿の垂れながしをしていようと、かの女は知った顔つきではない。かの女は、良人にもだれにも冒させない塗籠の一室をもち、起されば、蒔絵の櫛笥や鏡台をひらき、暮れば、湯殿ではだをみがく。そしてはときどき、家人でさえ、あつと、びっくりするような衣装を着こんで、

(親類の中御門様へ、ごぶさたのお詫びに行つてまいります) などと、貴人の外出そのままな容態で、近所の牛車宿まで、なよかに歩き、そこからいつも、牛車を雇つて出かけてゆく。

『女狐じゃ……。あの美しさは』

召使まで、蔭ではいった。子飼いの郎党で、もう髪も白くなりかけている木工助家貞なども、じつとこらえる眼をして、よく、泣きやまぬ子を背に負いながら、出てゆく子の母を見送ることがあった。夜も、厩のまわりを、かれの子守歌の声が巡り歩いていることが毎度であった。

そんなときさえ、忠盛は、黒い柱によりかかったまま、臉をふさいで、黙然と、想い沈んでいるにすぎない。

経盛は、勉強家である。たいがいな場合、われ関せずと、机にむかつて、書を読んでいる。

その弟も、清盛も、早くから、勸学院の学生であったが、しかし清盛は、いつか通学をやめていた。——すこしは、学問もやれよ。と父からたまには戒告をうけるが、いまの世情を見ても、家庭をながめても、ばかばかしくて、孔子の書物などは真にうけられなかった。父の懶惰をまねて、弟の机のわきにふんがり返り、加茂競馬のうわさとか、近所の女のはなしなど持ちかけた。弟が耳をかきないと、天井をにらましながら、鼻の穴などほじくっている。また、ときには、裏のめ場へ飛び出して、にわかに、弓を引いてみたり、不意に、厩の馬にむちを加え、大汗かいて帰つて来たり——といったふうで、とかくかれには、規矩がない。

母も、変り者。父も変り者。ひとり次男の経盛が、やや真面目そうではあった。けれど、かんじんな総領息子子の清盛がまた、このとおり、どこか毛いゝ違ひにできている。困った家族だと、感傷になれば、限りもなく厄介な人間同士の寄り合いだった。とはいえ、それらの個性個性をも引くくめるめての、伊勢平氏という一つの「家」は、そのころ、まだ極めて少数な武人の家として、有数な名家にはちがいない。都の片すみでは、もう数代の祖おやを経ている中流社会の一戸であった。そしてこれから、屋敷畑の芋のように、子蔓孫蔓を幾代にも世の中へはわけて行くであろうことも確実であった。しかし、清盛はまだ、自分がどんな芋なのやら、運命の蔓に生っているものやら、何も自覚はしていなかった。ただかれの若い生命は、至極、屈託のない、健康なものであったということだけはたしかである。

きょうの使いはわかつていゝ。清盛には読めていた。また親戚へ金借りにゆくのだ。

めずらしいことではない。——先は、父のただひとりの弟、兵部省出仕の北面の侍、平ノ忠正の家と、泣きつく所もきまっている。

この正月。——明けてことは保延三年だが、春早々から、あの母が、風邪を重らせて、寝こんだのである。

典医を呼べの。高価な薬を取り寄せろの。やれ、夜具が重い。こんな食物は病人にたべられぬのと。——例によって、かの女のわがままは、家じゅうを、手こずらせた。

ここ一年の余、うっかり忘れていた貧乏が、そのため、一夜のうちに、床のようにまたやってきた。

おとし、海賊の平定の功で、忠盛が、めずらしくも朝廷から賜った恩賞の品じなも、一封の金子も、有ればあるにしたがつて、かれの妻の浪費と、ことしの病氣とで、むなしく消え、昨今はもう朝晩の粥すら、すすりかねて来た。

そこで、毎度なので、書きにくそうな手紙を書いた忠盛は、清盛にさえ、いいにくそうに、

(平太。また、すまんがのう、叔父御のところまで、行つて来てくれい)

となつたきょうの使いなのだった。

それはいい。それは忍ぶとしても、出がけに、

平太よ。また、帰りに、塩小路などを、うろつくなよ——。

の一言は、氣にくわない。
『子どもにだつて、少しは、楽しみがあつてもいいだろう。あわれや、この春で、おれも青春二十歳になる。その若さで……叔父貴のやしきへ金借りとは』

自分で自分がいってしまった。こう思つても、決して、不逞ではあるまいと、清盛は考えかんがえ歩いていた。

『またかよ。平太……』

叔父の忠正は、手紙を読んで下におくと、実にいやな顔をした。手紙が求めているものを貸してはくれたが、叔母も出て来て、

『なぜ、和郎は、母方の身よりへ無心に行きなさらぬ。わろの母御前は、みな、れっきとした、藤原の朝臣とやら、中御門様とやら、きら星な御貴人ぞろいではおわさぬか。また、それが大自慢の、よい母御前をおもちではないのか。——忠盛どのへも、いうてあげたがよい』

それから始まつて、清盛の前に、かれの両親の棚下ろしである。子として、これを聞くほど、辛いことはない。清盛は、ぼろぼろ泣いた。

だが、忠正の家庭とて、案でないことは、かれにもわかる。朝廷にも、院の方にも、衛府や武者所の制ができて、たくさんな武士をおくことにはなつて来たが、いわばこれらの人間は、野性で勇猛な点だけを取りえに思われて、藤原貴族などからは、紀州犬や土佐犬の性能なみに、番犬視されている。公な奴僕にすぎないのだ。もちろん殿上人との同席はできず、地方に所領があつても、たいがい山地や未開地である。平氏も源氏も、おしなべて皆“地下人”と呼ばれていた。給田の収入は薄く、余得もなく、武士の貧乏は、通り相場なのだった。

わんわん市場

二月の寒風を、初東風とかいう。春だと思うせい、か、よけい冷たい。

『ああ、腹が減った。すき腹のせいもあるぞ』

叔父も叔母も、飯を食うて行けともいってくれなかった。

——それさえ、かえって辛いに思えたほど、その門は、逃げるように飛び出して来たのである。もうもうこんな使いはしたくない。こじきになつてもしたくないと思う。

『おれともある者が、ぼろぼろ、涙をこぼしたのが残念だ。銭を見て、泣いたと、先では、考えたらうな。それがいいまい』

まだ臉が、腫れぼったい。——往來の者が振り返ると、かれは、泣いたあとを、見られる気がした。いや、涙よこれの顔よりも、じつは若い清盛の身なりの方が、およそ人目を引くものだった。

よれよれな布直垂に、垢じみた肌着ひとえ。——羅生門に巣くう浮浪児でも、これほどは汚くあるまい。もし、腰なる太刀を除いたら、一体何に間違われるか——だ。泥田を踏んで来たような草履や革足袋。うるしのはげた烏帽子は、すこし斜かいに乗っかっている。背丈はずんぐり短かく、かた肥りという体軀だ。

背のわりに、頭が大きい。耳、鼻、口、造作すべてが、大振りなのが、この顔の特徴だった。眉毛はふとく、それにとまなう切れ長な眼じりが、下がり気味に流れているため、いささかは愛嬌もあつて、あやうく『異相なる小男』の残念さを救っているという容貌である。

いや、それと、色が白いことである。大きな耳たぶが、血のたれるばかり紅あかとしているのも、この青年の、異相ながら、美しさの一つと数えてよい。

——で、人は、『この小殿であらう』何をする武者やら、小冠者やら？』と、怪しむのであった。また悪い癖で、清盛はよく、ふところ手で歩く。良家の子弟にはない風儀だ。父の前では絶対にやらないが、戸外へ出ると、癖が出る。——これはまちがいない、塩小路に集まる人種の影響であつた。

『きょうは、立ち寄るまい。銭を持っている……。口惜しくも、借りた銭を』

かれは自分をおそれた。その魅力が、すでにむらむら意欲に響いていたからであらう。生まれつき、意志が弱く、煩惱には克てない自分を、よく、わきまえてはいたのである。

しかし、そのつじまで来ると、もうだめだった。狭い小路の口から、官能の好む生ぬるい風が、迷いを嘲って流れてくる。

『やつてゐるな。いつものが……』

雉子の股や、小鳥のくし焼を売っている老婆のそばで、べつな男は、大きな酒瓶を、道ばたにすえ、自分も飲んで、酔つて、歌いながら、実は目的の、酒売りをやっている。

——また、ひとかごの橘の実をひきにかかえ、しょんぼりと、市場の日陰にひさいでいる小娘もある。下駄売り、沓直しの父子も見える。干魚や、古着などの、ささやかな物をならべて、露命をつなぐ棚の軒も、この一画だけで、百戸以上もあるという。

どれもみな、世の下積みひしがれた、あわれな雑草の生活の姿でないものはない。けれど、こここのぬかるみに根をおろして、生きぬき、生き合おうとする生命の群れとして観ると、おそろしい生存の闘いが、人の思慮分別をくらし合っているよ

うな雰囲気でもあった。どこかで、煮焼きする食べ物、煙りは、黒い人混みの秘密をつつみ隠しているようだし、辻博突だの、淫らな女たちの嬌笑だの、あかん坊の泣き声だの、放下師の鼓だの、そのほか識別しがたい臭気と物音が、耳の穴へ混み入ってくる。いってみれば、百敷の大宮人たちの貴族文化に張り合って、この人びとが身相応に誇って持つ唯一の樂園なのである。凡下や地下人だけの花の都なのだ。——だからこそ、清盛の父も、いうのである。あんな場所へ、ゆめ、近づいてはならんぞと。

ところが、清盛は、ここが好きだ。この人間たちにも親しめる。市場の西の大榎の下では、『醜草市』とも、ただ『クサ市』ともよぶ泥棒市がときどき立つが、それさえ、かれには、愉快に見えた。

『なあんだ。やれ強盗だの、山賊だのというが、こうして、食えていれば、仲よく暮しているではないか。ほんとの悪党は、この中にはいそうもない。いるのは、雲の上と極まった。叡山だの、園城寺だの、奈良だのにも、金欄ぐるみの悪仏どもがたくさんに』

かれはいつか塩小路の人ごみにもまれていた。そして、あつちをのぞき、こちにたたずみ、夕迫るのも忘れて、呆うけ歩いていた。

クサ市には、きょうは、人影もない。

賽日とみえて、そのかわりに、榎の下、の赤い灯だの、花束だの、香の煙りが、夕やみにゆらめいていた。

白拍子らしい女たちや、もっと低い種類の遊び女たちが、幾組も連れ立って、後からあとから榎の下へ詣ってゆく。

むかし、袴垂保輔という大盗の妾がここに住んでいた。その跡がこの大榎ということになっている。そこで、いつごろからか、この榎に願掛けすれば、浮気男に夢が通じるとか、怨仇を病みつかせるとかいう迷信が生まれ、袴垂が獄死した永延二年六月七日の七ノ日を賽日として、クサ市の盗児から、いろんな種類の女たちまでの参詣が、こんな風ににぎわうのだった。

四位の朝臣の家に生まれながら、放火、群盗、殺人などの悪行をほしきままにして、世に袴垂の悪名を売った男の名は、もう百年以上もたっているのに、妙に、今でも市井に何か残している。

それは、藤原一門の専横も絶頂期の、法成寺関白道長のころの一社会事件であった。——この世をばわが世とぞ思ふ——と歌った道長の全盛ぶりに対する細民たちの感情を、袴垂が、一個の身に代表して、あんな反抗をやったものと、当時の庶民は、逆にかれを礼賛したのかもしれない。とすれば、藤原閥の命脈のあるかぎり、ここの香華も、絶えないであろう。庶民の迷信は、庶民の祈りの変型といえなくもないからだ。

『たしかに、おれの中にもある。袴垂と似たような血が……』

清盛は、榎の下、の赤い灯が、自分の未来を暗示するものみたいに思えて、なんだか、こわくなってきた。——で、急に、立ち去りかけると、

『おい。伊勢ノ平太。さっきから、何を見ていた。榎詣での女の顔でもながめていたのか』

夕やみなので、だれなのかも、よく分からない。はっとするまに、相手は両手をのばしていた。そして、かれの両肩を両手でつかみ、首ががくがくするほど揺すぶった。

『あ。……盛遠か』

『さればさ。この遠藤盛遠を、わすれるやつがあるものか。ど

うした、おぬし。いやに、呆^うけた顔しているじゃないか」
『え、そうか。……まだ臉^{たま}が、腫^はれているか』
『美しい母御前と、スガ目殿との夫婦喧嘩^{けんか}で、また、わが家にもいたたまれずに出て来たか』

『うんにや。母は、寝^ねこんでいる』
『病氣^{びやうき}でか……』盛遠は、冷笑した。

ふたりは、勸学院の同窓だった。年は、清盛が一つ上だが、学生のころから、盛遠のほうが、ずっとおとなびていた。学問でも、清盛はかれの足もとにも追いつけなかった。教授の文章博士などからも、俊才といわれたり、将来の逸材と、属目^{しゆぼく}されていた盛遠なのだ。

『あはは。申しては、失礼かもしれぬが、あの女性^{にょせい}の病^{やま}などは、気まぐれ病、わがまま病ときまっている。なあ平太。くよくよするなよ。それよりは、どこかで、酒でも飲もう』

『え。酒……』

『そうさ。祇園女御^{ぎおんなご}は、幾人の子の母になろうと、やはりむかしの祇園女御だった——というに過ぎないはなしじゃないか』

『盛遠。だ、だれのこただ。祇園女御とは』

『知らないのか。……わぬしの、母の前身を』

『知らぬ。……和殿^{わだん}は、知っておるというのか』

『おう。聞きたければ、話してやる。ともかく、おれについて来い。スガ目殿は、宿命としても、若い平太までが、青春をしませてなんとするぞ。——日ごろから、ひとことならず思っていたところだ。べそべそするな。なんだ、あんな女ごときに』

盛遠は、もひとつ、どやすように、清盛の背をたたいて、暗い小路を、先に歩きだした。

胎児清盛

この家には、壁がない。

部屋^{へや}のさかいは、板仕切りであり、入口には、古布^{ふるふ}を帳^ととし、妻戸^{つまど}の代わりに、むしろなど、垂^たれてある。

いくら寝坊^{ねぼう}な者でも、これでは隣^{りん}りのばか騒^{さわ}ぎに、安眠^{あんみん}しているわけにゆくまい。——鼓^つを打つ、鉢^{はち}をたたく、猥歌^{わうか}をうたう。あげくに今、しりもちでもついたような、家鳴^{かなり}と、男女の笑い声が、一しよに沸^わいた。

『や？ おれは。……しまった。もう、何^{なん}刻^{とき}だろう』

眼をさましたとたんに、清盛は、ひどくうろたえた。そばには女が寝ている。たしかに、六条洞院^{ろくじょうどういん}の遊女宿^{あそびよど}。——盛遠に誘われて来た家である。

『弱^{よわ}ったな。帰^{かえ}らにやならぬ……』

家へ、なんと、うそをいおう。父忠盛^{ちゅうせい}の顔つきが見える。母のガミガミが聞こえるようだ。幸い、叔父^{しやくふ}から借りてきた金は、みんなまでは、費^{つか}っていない。——そうだ、今のうちに、むっくり起きた。

『……が。盛遠は、まだ、騒^{さわ}いでいるのかしら』

女の黒髪^{くろかみ}を踏^{ふみ}むまいと、清盛は、その胸^{むね}を跨^{また}いだ。そして、灯^{あかり}のもるふし穴^{あな}から、隣^{りん}りの騒^{さわ}ぎをのぞいてみた。何もない板じきの一部屋^{いつへや}には、松明^{しょうめい}りを灯皿^{とうひら}にくべ、どこの法師^{ほうし}たちや、悪僧^{あくそう}面^{めん}が三、四人、遊女^{あそびよ}たちを、ひざへのせたり、抱えた

りして、すでに飲み空けた酒壺が、幾つも、横に、ころがされ
てある。

『あ。先に帰ったな。……盛遠はおれを残して』

かれは、一そうあわて出した。例の、ぼろ直垂を着け、太刀
を腰へつるすの、あたふたと、縁伝いに、出口をさがした。

暗いし、戸惑い気味でもあった。何やら、足の先に、金屬的
な物音を蹴のこしたまま、逃げるように、戸口を出た。

すると、物音に、とび出して来た法師たちが、

『待てまてつ』と、口ぐちに、清盛のうしろで、わめいた。

『ひとの長刀を蹴たおしながら、肩そびやかして出て行くは、
どこの何者だつ。待ちおろうッ、そこな小男』

清盛が振り向いた眼のさきへ、チカッと来たのは、すでに、
言葉ではなく、白い長刀のひらめきだった。おそらく叡山かど
こかの、屈強な荒法師の手練にちがいない。死神の手のよう
に、それは迅かった。かれは一ぺんに酒氣もさまし、宵の快楽
も、あとの悩みも、消し飛ばして、夜風の中を、逃げていた。

枯れ草の生えた崩れ築土と、腕木も傾いた怪しげな屋敷門と
が、眼のまえに來ていた。清盛は、わが家と気づくと、そっと
した。

『困ったぞ。なんといおう？ ……なんと』

それもだが。

今夜にかぎって、父のこわき以上、母を見るのが、いやだっ
た。たまらなく、腹が立っている。あの声をきくのも、いやだ。
ほんとなら、こういう時こそ、ともに父の前へ、謝つてもら
いもしたい母親に、こんな反逆をいだく子が、どこにあらう
か。築土の崩れを見あげながら、かれは、孤独の感にとらわれ

ていた。

多感な、かれの天性に近い。こめかみの辺を、異常に、けい
れんさせながら、その大頭の中では、何か単純でない多血なあ
わつぶを、奔流みたいに、明滅させているかであった。

『いっそ、母の素姓など、知らずにいた方がよかったかもしれ
ぬ。……盛遠に会って、あんなことを、聞かされなければ』

それも、悔いられたが、その盛遠と、女たちを交えて、大酔
いした遊びの座も、きれぎれ、思い出されてくる。いや、もっ
と忘れかねたのは、遊女宿の一間に、置きのこして来た寝ぎた
ない黒髪と、容易にどうにでもなる四肢をもった肉塊だった。
それが美人か、醜女かなどは、問題ではない。二十歳にして初
めて知ったふしぎな忘我と、生命の恍惚に、かれ自身が、ただ
おどろいた事実なのだ。そして、これが、女のはだを知ったと
いうことなのか——と、頭はのべつ甘い追憶にとらわれて、
何か、すかっとして、燃え殻のようになった軽さを、自分の肉
体に気づくのだった。

(ひょっと、女のおいが、自分の体に、しはしまいか)

このおそれが、また、かれをしばらく、たじろがせていた。
しかし、やがて築土を、跳びこえた。なぜ、こんな夜に限って、
こんな罪悪感にとられるのか。ただの夜遊びでは、何度も、
越えなれている築土なのだ。——覚音は、いつものように、厩
の裏の畑へ降りた。

『おつ。和子様よな。……平太様かよ』

『あ。じいか』

清盛は、棒立ちのまま、わが髪の毛をつかんでしまった。

爺というのは、木工助家員である。父に次いで、清盛がけむ
たいのは、この忠誠な家来であった。自分など生まれないうち
から、家に仕えて、もう前歯も二、三本欠けているほどな者だ

し、いかに世間が、この主人を、無能といおうが、貧乏平氏と嘲ろうが、かれのみは、武家の家憲を守りとおし、主従の礼儀、ことは遣い、いやしくも、折り目切れ目を、くずしたくない家人だった。

『なんと、なされましたな。この深夜までは、街の灯とて、点つてはおりますまいに』

ころげ落ちた清盛の古烏帽子を拾いあげて、その人の手に返しながら、木工助はなお、嘆き撫でるように、かれのすがたを見まわした。

『もしや、喧嘩のちまたにでもと、取り越し苦労の限りもなく、寝よと、大殿に申されても、寝られたことではござりません。……でもまあ、ようこそ、ようこそ』

真実、木工助は、眼をほそめて、安堵によるこびほぐれている態だった。それだけになお、清盛は、かれの顔を、まともに見ることができなかつた。

父は、寝ているか。まだ起きておられるか。

母は、どうしている？

清盛の心配は、ただそこにあつたが、木工助は、かれのたすねもまたず、こう、なだめた。

『さ。何も、お案じなされずに、そつと、臥床へお入りなされませ。すぐ、寝屋のお内へ』

『いいのか、じじ。……父上のお居間へ、伺わなくても』

『あすの朝、御きげんを見て、じじも一しよに、お詫びに出ましようほどに』

『でも、怒って、おいでだろうな。わしの帰りの、おそいのを』
『もとより、御立腹には見えました。宵のころ、木工助やある』

と、ただならぬ御気色で。……彼奴め、どこを、遊びほうけているやら、塩小路など見てまいれ……との仰せに、じじめが、心得申して、ほどよう、取りつくろうておきました』

『そうか。なんといいておいてくれたぞ』

『かりにも、大殿へ、うそをつく木工助のせつなさを、すこしは、お察しくださります。……堀川の叔父御さまのおやしきにて、和子様には、御腹痛で寝ておられました。……やがて、御腹痛もおさまれば、夜明け次第、お歸りに成られましよう、かように、お答えしておきました』

『すまないすまない。じじ、かんべんしてくれやい』

厩の横の白梅が、水の粒みたい、に、夜空に滲みを描いていた。つんと、冷たい梅の香気にも衝かれて、清盛は顔を皺めた。……そして、涙が、木工助の肩へこぼれた。

いつのまにか、清盛は、じじの肩に、抱きついていたのである。木工助は、主君の子にそうされて、恐懼にかたくなっていた。だが、枯木のようなかれの肋骨の下にも、やがて烈しい感情が波打っていた。性来、泣き虫で多情な清盛の熱いものと、日ごろから、包みにつつみ、抑えにおさえていた老骨の中のもの、とが、弾みを得て、どつと、どつとも理性を破つて、一しよに嗚咽し出した。ついには、声をあげて、ひとつ体みたいに、抱き続れたまま、地へ、すわってしまった。

『わ、和子様よ。あなたは……あなたは、このじじを、さまで、お力に思ってくださいますか』

『あつたかいのだ。木工爺よ。おまえの、体だけが、おれには、あつたかい。——おれは、ひとりぼっちの寒鴉だ。……母は、あんなだし、父上も、ちがっていた。おれは、平ノ忠盛の、ほんどの子ではなかつたそうだ』
『げつ。和子様。あなたは、そ、そんなことを、だれに、お聞』